【追悼文】

藤掛和美教授の急逝を悼む

人文学部長
赤　塚　行　雄

9月26日，私は名古屋から横浜の自宅に帰っていた。

台風一過，久しぶりに涼風が吹いている。クーラーをとめて窓を開ける。凌霄花(のうぜんかつら)の花が，ゆったりと揺れている，まことに爽やかな日曜日だった。

一仕事終えた後，私はトレヴェニアンの推理小説を取って，ベッドに横になりながら，いい気分で読みふけっていた。

すると突然にけたたましく電話が鳴り，「藤掛先生が急逝されました」という。私は愕然とした。前々日，大学本部の会議に一緒にでて，別れたばかりである。心筋梗塞だという。

階下に下りて居間に入ると，妻がパイルちゃんを女王様のように大きなソファーに座らせ，「くまプー」の絵本を呼んでやっている。パイルちゃんは妻の知人の子供で，理由があってあずかっている。混血の可愛らしい女の子。まだ三歳である。

「どうかしたのですか」

と妻が聞いた。

「藤掛先生が死んだんだ。」

と言ったら，妻はびっくりして絵本を落として立ち上がった。穏やかな日曜日はすでに暗転してしまっていた。

私は，ふとパイルちゃんのような可愛らしい女の子もやがて年をとり，死んでゆくのだと切なく思った。たとえ，生命という悩ましいものをもたない人形だったとしても，やがて長い時間の経過の中で，破壊されて行く。

そういうことを，私たちは忘れて生きている。

人間は，男女老幼を問わず，カオスの雲海と，硬直する死の谷にはさまれた細々とした尾根の上を，綱渡りするように，とぼとぼと歩いている。それ

が「生」の現実なのだ。すぐに小島広次氏，続いて三浦朱門氏から慰めの電話が入った。二人とも，私と藤掛氏のつながりを知っていて，電話を入れてくれたのだろう。戦前の教育をうけた男たちは優しいところがあるなと思った。私は牧事務長からの連絡で，弔辞の下書きをワープロでうってＦＡＸで送った。哀しみは，いよいよ深くなっていた。

藤掛和美氏は，名古屋大学文学部出の国文学者で，御伽草子の研究をしており，創作教育にも熱心な人だった。穏やかで優しい人柄ゆえに，学生たちの人気が高かった。

私は，看病する時間さえ与えられずに，ふいに夫を失った藤掛夫人の驚きと哀しみを，改めて思いやった。しかし，不幸は時として幸福感がもたらすのと同じ一種の勇気と活力を与えてくれる。ふと口を突いて出てくる言葉があった。「風立ちぬ，いざ生きめやも」。

（『毎日新聞』ジャック＆ベティ欄　1999年10月20日付）